

『あなたの主人は誰ですか？』

'20/09/06

聖書箇所: マルコの福音書 2 章 23-28 節 (新約 p.68)

今日も、まず初めに、皆さんに質問をさせてください。「あなたの人生における、ご主人様は誰でしょうか？ 皆さんは、どういった存在や教えを一番に優先しておられるのでしょうか？」…まあ、このような質問に対して、クリスチャンになって数年も経てば、どういった風に答えれば良いか？ ここにおられる皆さんなら、ある程度、模範的なお答えをすることができるかと思えます。

しかし、今日ぜひ、皆さんに考えていただきたいことは、そういったような…、模範的な答えではなく…、皆さんが、“実際に”、何のために生きておられるのか？どんな意見や考えを最優先しておられるのか？ということであり、例えば、皆さんが普段、何を基準に物事を判断し…、どういったことを優先しておられるのか？あるいは、皆さんが、どういったことで気分を害され…、どういったようなことに関心を持っておられるのか？ということでもあります。

命題: パリサイ人たちの過ちと、イエス様の教えについて…

実は、今日のみことばは、そういったことを、私たちに問い掛け…、また、気付かせてくれるものであると思います。今日、皆さんと一緒に学んでいきたいテーマは、今から2000年前の、この当時、パリサイ人たちが陥ってしまっていた過ちと、そういった過ちに陥らないために、イエス様が教えてくださった「アドバイス」について…、であります。そういったことを、私たちが正しく理解することによって、私たちは、当時のパリサイ人たちと同じような過ちに陥ることなく…、しっかりと、正しい目標を据えて、残りの人生を歩んでいけるのではないかと、思います。どうぞ、今日のみことばである、マルコ 2:23 以降をお開きください。

I・パリサイ人たちの陥ってしまっていた 過ち とは？ (23-24 節)

まずは、今日のみことばの内、23-24 節までのみことばをお読みしたいと思います。そこから、この当時のパリサイ人たちが陥ってしまっていた“過ち”というものが、どういったようなものであったのか？ということ、皆さんと一緒に確認していききたいと思います。

23 ある安息日のこと、イエスは麦畑の中を歩いて行かれた。すると、弟子たちが道々穂を摘み始めた。

24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。」

●ある安息日に、弟子たちが行なったこと

今読んだ 23 節をご覧くださいと…、ある時、イエス様の弟子たちが空腹を満たすために、麦畑から、麦の穂を摘んで食べていた…ということで、現代の私たちの感覚 & 一般常識で考えますと、何か、近所の庭になっているミカンを盗んで、食べてしまった…というものと似たような感覚を、皆さんは持たれるかも知れません…。しかし、このみことばは、そういったことを教えているわけではありません。

実は、旧約聖書の申命記 23:24-25 には、こういったことがはっきりと教えられてあります。『24 隣人のぶどう畑に入ったとき、あなたは思う存分、満ち足りるまでぶどうを食べてもよいが、あなたのかごに入れてはならない。25 隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑でかまを使ってはならない。』⇒皆さん、分かってくださいます？つまり、神様は、隣近所の者たちに対する憐れみの故に…、一時的な空腹を満たす程度なら、そこで栽培されているぶどうや麦を摘む程度のことは、公に認めてくださっているのです！…この当時の文化 & 習慣で禁じられていたのは、ぶどうをかごに入れて収穫したり…、あるいは、麦をカマで刈ったりして…、明らかに、自分の空腹を満たす“以上”

のことは行なうことが、窃盗 (= 盗み) であると考えられていたのです。ですから、このみことばで、パリサイ人たちが、イエス様のことを非難したというのは、そういったことではありません。

このみことばをよ〜くご覧いただきますと、24 節で、『なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。』と書かれてあります通り…、ここで、パリサイ人たちが問題としていることは、イエス様の弟子たちが麦の穂を摘んでいたかどうか？ということではなく…、その行為を、『安息日に』していた！ということなのです。

●「安息日の規定」とは？

しかし、安息日と言われても、これまた、現代に生きる私たち日本人には、簡単に理解できません。そこで、皆さん、恐れ入りますが、出エジプト記 20 章をご覧くださいませでしょうか。ここは、所謂、「十戒」と呼ばれる箇所、すべてを創られ…、すべてを支配しておられる真の神が、イスラエルの民たちを、エジプトの地から連れ出してくださった後に、そのイスラエルの民たちが指針とすべき10の戒めを教えられた、言わば、イスラエルの民たちからすると、絶対に守られるべき「憲法」に相当するようなみことばが記されてあります。

その、4番目に当たる教えが、所謂、「安息日の規定」と呼ばれる命令なのですが、どうぞ、そちらをご覧ください。出エジプト記 20:8-11、『8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。10 しかし七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も——11 それは【主】が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。』

今、読んだところ、10 節に、『あなたはどんな仕事もしてはならない！』と書かれてあります。この時代、1日は日没で終わり…、その日没で、また新しい1日が始まる…とされていました。…ですから、ここで言われています安息日とは、今で言うところの、「金曜日の夕方から土曜日の夕方」に当たります。実は、今でも、イスラエルに行きますと、この「シャバット」(שַׁבָּת)と呼ばれる安息日(ヘブル語の「休む、止める」という言葉が語源)には、多くの人たちが、ここ 10 節の、『あなたはどんな仕事もしてはならない！』という教えを守っています。

こういったみことばのゆえに、イスラエルの者たちは、今でも、この十戒が教える安息日の規定を守る…ということに関して、私たち日本人には到底理解できないほどの厳格さでもって、こだわっています…。実に、パリサイ人たちは、そういったことを、イエス様に対して非難したのです！「あなたの弟子たちは、安息日に、なんとことをしているのですか！」って…。実は、出エジプト記 35:3 には、『安息日には、あなたがたのどの住まいのどこでも、“火をたいては”ならない。』とあって…、安息日には、火を起こすことも禁じられていたのです。

ま、そういったこともあって、現代でも、イスラエルでは、安息日に火を起こしたり…、また、料理をしたりしないで済むように…、安息日が始まる金曜日の日没までに、調理を済ませてしまうという習慣が根強く残っています。それだけではありません。例えば、エレベータなども、自分が止まりたい階のボタンを押すことによって、電気回路内で、わずかな火花が起こってしまうことが、「火を起こす」ことに相当することによって…、それを避けるため、安息日には、自動的に、ボタンを押さなくても、エレベータが全部の階に自動的に止まるように設定されています。また、信じられないことに…、特に、この律法の教えに厳格な者たちは、安息日に救急車が走るだけでも、その救急車に石を投げたりすることが、未だにあるのだそうです…。

●「安息日の規定」が定められた目的

でも、皆さん…、考えてくださいますか？ 一体、神様は、何のために、この「安息日の規定」を定められたのでしょうか？ 果たして、神様は、本当に、イスラエルの民たちが、安息日に、どんな労働もしない！ どんな小さな火も起こしてはならない！ という…、ただ、そういったことだけを願っておられたのでしょうか？

今、皆さんは、出エジプト記 20 章を開いてくださっていると思いますが…、そこには、何と教えられていますか？ ⇒どうぞ、もう1度、出エジプト記 20:11 に注目してください。『それは【主】が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれた“からである。”それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。』⇒ここ 11 節の中間に、『…からである』という言葉が使われていることがヒントです。一体どうして、神が、安息日なる日を定められたのか？ その理由は、すべてのものを1週間で創造された、真の神様のことを覚えるためであったのです！

それと、あと、実は、旧約聖書にもう1カ所、十戒が語られている個所があります。申し訳ありませんが、今度は、申命記 5 章をご覧くださいませるか？ 旧約聖書をじっくり読んでくださると分かるのですが…、実は、出エジプトを経験したイスラエルの民たちのほとんどは、神様に対する不信仰の故に、わずか40年ほどの間に死に絶えてしまっています…。そこで、モーセは、新しい世代になった若者たちに、もう1度、神が語ってくださった十戒の教えを説いています。それが、ここ申命記 5 章のみことばです。

その、申命記 5:12-15 が、安息日の規定です。『12 安息日を守って、これを聖なる日とせよ。あなたの神、【主】が命じられたとおり。 13 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。 14 しかし七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘も、あなたの男奴隷や女奴隷も、あなたの牛、ろばも、あなたのどんな家畜も、またあなたの町囲みのうちにいる在留異国人も——そうすれば、あなたの男奴隷も、女奴隷も、あなたと同じように休むことができる。 15 あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、【主】が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、【主】は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。』

⇒ここでも、出エジプト記 20 章と同じように、安息日に関する教えが書かれています。ここで、神が、安息日を守るよう命じられた理由は、2つ、書かれています。まず、1つ目は、自分たちが、エジプトで奴隷であった時のことを思い出して、社会的弱者に対して、憐れみの気持ちを持ちなさい！ ということであ…、もう1つは、そのエジプトの地から助け出してくださった神を覚えるためであります。

そういったことから分かるのは…、安息日にイスラエルの民たちが覚えるべきであったのは、1番に、真の神様のことであり…、その神様のことを覚え…、その神様が喜んでくださるよう…、使用人や外国人に対しても休息を与えてあげるような…、憐れみの心を持つべきことであったのではないのでしょうか？

●パリサイ人たちがイエス様たちに質問した目的

しかし、残念ながら、当時のパリサイ人たちは、神様が意図されていたような、憐れみの心を持ち…、真の神様のことを強く意識するような思いで、安息日を守ってはおりませんでした…。そのことが、今日のみことばのすぐ後を見れば分かります。どうぞ、今日のみことばに戻ってくださいますでしょうか。その、少し後、マルコ 3:1-2、『1 イエスはまた会堂に入られた。そこに片手のなえた人がいた。 2 彼らは、イエスが安息日にその人を直すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。』⇒皆さん、聞いてくださいました？ これまで、何度も、パリサイ人たちがイエス様の周りに居た理由が、ここに、はっきりと書かれています。彼らは、イエス様の教えを聞きかかったものではありません。イエス様の語ってくださる救いに関する教え…、福音のメッセージに興味を持っていたわけではなくて…、ただ、彼らは、イエス様のことを訴えたかっただけなのです。

どうか、皆さん、もう1度、思い起こしてください…。天の神様は、一体、何のために、安息日という日を設けられたのでしょうか？ ⇒それは、1週間の内、特に、安息日において、真の神のことを覚えるためでありました。1週間の内、その日だけは、忙しく働くのではなく…、しっかりと休息を取って…、神が喜ばれることをじっくりと考え…、そういったことを追い求めるためであったじゃないですか！ そうでしょ？

しかし…、パリサイ人たちは、その、休息を取るべき安息日に…、休息を取るところか…、その逆に、特に、目を光らせて…、イエス様のことを訴えてやろうとして、監視していたのです！ …と言うのも、その安息日こそが、イエス様を訴えるべき口実を見つけやすかったからです。

実際、イザヤ 56 章(1-7 節)などを見ても、**「特に、安息日においては、悪事に手を出さず…、神の喜ぶことを行なうべきである…」**といった趣旨のことが教えられています。もちろん、それが安息日であろうとなかろうと、私たちは常に、神の前に正しいことをすべきである！ ということは言うまでもありません。しかし、罪深い私たちは、特に、そういったことを覚えて…、ますます、清く歩んでいくことを実践していくために、神が安息日という日を定められたのではないのでしょうか？

しかし、残念ながら…、当時のパリサイ人たちは、神のみことばを民衆たちに教えるべき立場に居ながら…、全く、そういったような、神様のみことばというものを理解できずにおりました…。いえ、それどころか、神から与えられたみことばを持って、他人を裁き…、神様のみことばというものを損なってしまっていたのです。そうでしょ？

先日でも学んだように、私たち人間は、本当に弱い者で…、いつの間にか、何かの虜になってしまうことの多い者です。ある人は、お酒の虜になったり…、また、ある人は、ギャンブルの虜になったり…、また、別のある人は、地位や名誉…、あるいは、金もうけの虜になったりします。…でも、だからこそ！ 私たちは、本当の従うべきご主人様を見つけ出して…、その御方にしっかりと仕えていかなければならないのです。そのことをみことばは、このように教えてくれています。ガラテヤ 5:1 で、『キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。』⇒イエス・キリストは、かつて、罪の奴隷であった私たちを罪の力(=束縛)から解放してくださいました。もはや、私たちは、罪に対して、敗北し続けるのではなく…、罪に対して、勝利していく道が備えられたのです。今、お読みしましたみことばの後には、私たちには、大きく分けて2つの選択肢があるということが教えられています。1つは、己の肉に従って歩む生き方で…、もう1つは、神の御霊に従って歩む生き方です。その選択は、皆さん1人1人が決めていかないとはいけません！

II・イエス様の教えてくださった「真理」とは？(25-28 節)

次に、そういったパリサイ人たちに対して、**イエス様が教えられた“真理”というものに目を向けていきたいと思ひます。**どうぞ、今日のみことばの内、25-28 節をご覧ください。イエス様は、パリサイ人たちの非難に対して、どういったような態度を取られたのでしょうか？

25 イエスは彼らに言われた。「ダビデとその連れの者たちが、食物がなくてひもじかったとき、ダビデが何をしたか、読まなかつたのですか。」

26 アビヤタルが大祭司のころ、ダビデは神の家に入って、祭司以外の者が食べてはならない供えのパンを、自分も食べ、またともにいた者たちにも与えたではありませんか。」

27 また言われた。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたのではありません。」

28 人の子は安息日にも主です。」

●パリサイ人たちの非難に対する、イエス様のお答え

パリサイ人たちの非難に対して、やはり、イエス様は、みことばでもって、お答えになりました。まあ、当然と言えば当然なのですが…、ここで、イエス様は、Iサムエル記 21 章に記されている、ダビデが実際に経験したことを引用されています。なるほど、確かに、その個所では、嫉妬にかられたサウル王からのちを狙われて逃亡中であったダビデが、本来ならば、祭司しか食べることが許されていないパンを、祭司から与えられて、食べたという記事が記されています。

…と言うのは、その時のダビデは、飢え死¹にしようほどの空腹であったので、まあ言えば、緊急事態であったように考えられています。実際、この当時のパリサイ人たちも、いくら安息日で、あらゆる労働が認められていなくても…、それをしないと、人が死んでしまうような場合は、応急措置(≒根本的な治療は不可！?)に限って認められていた²そうです。つまり、そういったことから、明らかなのは…、みことばが教える様々な教えや決まりには、幾つかの例外も有り得る…ということではないでしょうか？

ちょっと、皆さん。ヨハネ 8:31-32 をご覧くださいませでしょうか。『31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。』』⇒ここで、イエス様は、実に興味深いことを教えてくださいませ。…もしも、私たちが、しっかりとイエス様の言葉(≒みことば)にとどまるなら、私たちは真理によって、自由にされる！というのです。

しかし、実際、この時に、イエス様の教えを聞いた者たちは、そのことが理解できませんでした。だから、33 節で、信じたはずのユダヤ人たちは、『(自分たちは、)決してだれの奴隷になったこともありません。あなたは どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。』というような質問を、イエス様に対して投げかけます。そして、しばらくの問答の後で、最後、イエス様は、こうおっしゃいます。ヨハネ 8:47、『神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。』⇒このことによって…、この時に、「信じる！」と告白したユダヤ人たちが、本当は救われていなかった！ということが明らかになります。…と言うのは、本当に救われた者は、神を愛し…、その神に聞き従おうとするからです。

実に残念なことですが…、この時のパリサイ人たちは、そういったことを、ほとんど、全くと言って良い程、理解できていませんでした。だから、彼らは、聖書のみことばに関しても、表面的な内容しか理解できずに…、全く、見当外れのことをたくさんしていたのです。前回の礼拝でも簡単に説明しましたように…、彼らが後生大事に守っていた教えは、ただ、古くから伝わっていた、“彼らの”言い伝えであって…、神様からのみことばではありませんでした。そうでしたしょ？

イエス様は、今日のみことばの最後、28 節で、「ご自分こそが、神であられる！」ということをはっきりと教えてくださいませ。それが、『人の子は、安息日にも主です。』(マルコ 2:28)というお言葉です。ここでイエス様が言われた、『人の子』というのは「来たるべきメシヤ」、約束の救い主という意味です。…ということは、つまり、ご自分こそが、その昔、イスラエルの民たちに、安息日を守ることを教えられた神ご自身だということなのです。

この時、パリサイ人たちは、安息日の規定にばかり縛られてしまって…、言わば、“安息日の奴隷”のようになってしまっていました…。しかし、そのようなパリサイ人たちにに対して、イエス様は、あなた方は、「安息日の奴隷となって、安息日に縛られたままで良いのか？それとも、安息日の規定を作ったわたし

(=神である主)に従うのか？」というようなことを問われているのです。私たちは、このように、真の神様か、あるいは、それ以外の何かを主人にするのか、そういったことを選ばなければならないのです。

●あるべきクリスチャンの姿とは？

今日、最後に、ぜひ、皆さんに考えていただきたいことは、このパリサイ人たちの過ちというものを踏まえて…、私たち自身が、同じような過ちに陥ってしまっていないかどうか？ということです。確かに、ここにおられる皆さんは、世間一般の日本人と比べて…、聖書のみことばに関しては、かなりの知識や理解を持っておられます。しかし、皆さんの中に、果たして、みことばの根っこが深く張っているのでしょうか？

パリサイ人たちは、安息日に、本来すべきであった…、静まって、神をあがめ…、神に喜ばれることを行なうどころか…、心の中を罪で満ちし…、他人のアヲを必死になって捜しておりました。神が喜んでくださるのは、みことばをよーく“知っている者”ではありません。そのみことばを愛し…、みことばを実践している者であります。果たして、皆さんは、みことばをより深く理解しようとし…、その学んだみことばを実践しようとする者でしょうか？私たちは、この神様の栄光(=素晴らしさ)を証しするために造られたのです！

この当時のパリサイ人たちは、確かに、口では、「私の主人は、すべてを造られた真の神だけです！」と言ったでしょうが…、実際は、その神のみこころを悟ることができずに…、安息日の教えに振り回されてしまっ…、結局は、自分たちの言い伝えを守っているだけであり…、言わば、安息日の奴隷のような感じでした。私たちが、このパリサイ人たちと同じような過ちに陥らないために、しっかりと、自分たちの言い伝えではなく…、神のみことばに留まっていなければならないのではないのでしょうか…。

●あるべき教会の姿とは？

その昔、実際に、聖書の教えを指針としながらも、大きな過ちに陥ってしまった教会があります。その中で最も有名なものは、ローマ・カトリックでしょう…。彼らは、イエス様の弟子であった、シモン・ペテロの優位性というものを必要以上に認めてしまったこともあって、歴代のローマ法王たちが無謬(=間違いを犯さない)ということにしてしまいました…。でも、そんなことは有り得ないのです！そんな間違いに陥ってしまったローマ・カトリックでしたから…、彼らは、どんどん間違った教えの中に迷い込んでしまいました。それが、例えば、マリヤの無原罪性や、マリヤの被昇天…、煉獄の教えなどです。そんなことが聖書の教えでないことは、しっかりと、聖書を読めば、一目瞭然です。…でも、カトリックの信者たちには、未だに、そういったことが分からないのです！

その逆に、プロテスタントの教会は、どうでしょう？確かに、宗教改革者たちの中で、解釈の違いや立場の違いなどで、幾つもの流派？があるのは事実です。しかし、それらの多くは、大切な…、根幹の部分では一致していることが多いです。それは、プロテスタント教会の教職者の多くが、逐一、聖書のみことばを研究し…、何度も、何度もみことばに立ち返ろうとしてきたからです。

残念ながら、そのみことばをいい加減に解釈して…、自分たちの好き勝手な教えを信じ込んでしまった異端グループもありますが、その根本的な問題も、また、聖書のみことばを自分のたちの都合の良いように解釈してしまった故であります。

そういったことから、私たちは、自分たちが同じような過ちに陥らないためにも…、しっかりと、神のみことばを研究し…、1人1人が、その教会や牧師に…ではなく、神様にしっかりと繋がってくださることです！そういった意味から、ぜひ、皆さんお一人お一人が、まずは、教会で語られているみことばに、しっかりと、耳を傾けてくださって…、その上で、それが本当に正しいものであるかどうか？果たして、今の自分の歩みを、神がどう御覧になっておられるのか？ということも、真摯な思いで、考えていただきたいと思えます。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。

¹「タルムード」ヤクート 2:120 を参照すると、その時のダビデは飢え死しそうな状況だったので構わない旨の記述あり。

²「タルムード」ヨマー 8:6 を参照すると、そのような記述がある。